

こやブランケット

ニュース 2025 vol.29 春号

米阪パイル織物(株)

和歌山県橋本市神野々 720

TEL: 0736-32-1404 / Mail: info@yyypile.com

営業時間: 8:00~17:00 (土日祝除く)

弊社HP

商品の詳細はQRコードをチェック!



チラシ見ていただいた方限定!
まとめ買いは相談に応じます。
詳しくは弊社まで連絡を!



世界中の子どもたちに夢を!



2025 年に入り、世界情勢に変化の波が押し寄せている。1月にアメリカの大統領に再び返り咲き、米国に限らず世界中がその言動に振り回されている。特に関税の上乗せは、世界中が戦線恐々とするところである。隣国のカナダとメキシコへの関税は、フェンタニル（麻薬性鎮痛剤）の持ち込みと不法移民対策との駆け引きのカードとしている。一方でウクライナやガザでの戦争の仲介を買って出ているが、当事者の同席なしの話し合いでは出口が見えない。国内に目を向けると、コメやキャベツ等野菜の高騰が続き、物価高騰に歯止めが効かない。コロナ禍に比べると街中のインバウンドの数も増え、生活も元に戻った気がするが、全体が潤っていると感じるまでは程遠い。今朝のニュースで、ウクライナの中学生の女の子が「勉強したって、役に立たない。戦争でいつ死ぬかわからないから。」と言って、自分の命を守るため、父親に本意ではないライフルの使い方を教わっている映像を見た。未来ある子どもにこんな絶望感を与えて、人類の未来はないと感じた。戦争を気にせず平和に暮らせる国のありがたさを改めて知った。今年も大リーグに注目が集まっている。大谷選手の二刀流再開は日本に限らず全世界の注目である。今年どんな活躍が見られるか楽しみである。サッカーの世界大会で FIFA ランク 1 位のアメリカに 13 年ぶりに勝利し、優勝したなでしこジャパンは日本中に明るいニュースもたらした。今年も世界の舞台で日本人の活躍から目が離せない。日本に限らず世界中の子どもたちに夢を与えてほしい。

万博

4月13日より大阪・夢洲にて世界 150 を超える国の参加により開催。大阪での開催は 1970 年以來 55 年ぶりとなる。シンボルである「大屋根リング」は世界最大級の木造建築だそう。釘などは一切使わず、柱とハリを垂直に組み合わせる日本の伝統工法「貫工法」で組み立てた。その大きさは、1周 2km、高さ 20m で、上に立つと会場内の様子や大阪湾を一望できる。パビリオンの数は国と国際機関併せて 160 を超える。各パビリオンでは、世界中の文化や技術に触れることができる。前回では動く歩道が話題となったそうだが、アップデートした今回は、前評判で聞く「空飛ぶクルマ」だろうか。万博会場と大阪港・尼崎のヘリポートをデモ飛行する。今や AI 技術の進歩によりクルマの自動走行は当たり前になりつつあるが、スーツケースにその技術を取り入れ、自動で目的地に案内してくれる技術や、自分の健康データを入力すると、25 年後の自分（アバター）を表示してくれる技術も体験できるという。今や主要駅などに多用されるデジタルサイネージ（電子看板）技術の応用で、各パビリオンが競って巨大映像（数十メートル四方）を駆使して自国の文化や芸術をアピールしているそう。万博の最寄り駅である地下鉄夢洲駅も近未来のイメージで創造された。訪問者が出会う 1 つ目のパビリオンのようだ。天井は折り紙をモチーフにデザインされ、改札の壁に幅 55m の超巨大サイネージには目を奪われる。照明の配置も創造性があり斬新だ。各パビリオンの外観を見るだけでもワクワクする。どんな未知との遭遇が待っているのか楽しみだ。



生きた化石

「生きた化石」という言葉は、誰もが 1 度は耳にしたことがある。身近なものでは、ゴキブリやイチョウ、カブトガニ、カブトエビといったものが挙げられる。ほかにカモノハシやイリオモテヤマネコ、アマミノクロウサギなど数えると結構ある。中には、「えー、そうなの?」というものもあるだろう。生態学的に進化途中のまま止まっているという判断らしい。その中で認知度 100% と思われるのがシーラカンスだろう。約 6,600 万年前の白亜紀に絶滅したと考えられていた。しかし、1938 年に南アフリカで捕獲され、生存していたことに世界が驚愕した。その後、インド洋コモロ諸島とインドネシア沖のスラウェシ島近海の 2 か所にそれぞれ 2 種が生息することが判明した。水深 150~700m に生息し、その生態は不明。先日、NHK がスラウェシ島沖で 72 時間連続撮影でシーラカンスの撮影に成功した報道があった。1 匹でも超珍しい魚が海底の岩陰に 8 匹も群れで生息している映像は、世界中が驚いたに違いない。普通の魚と違う特徴としては、ひれが 10 枚と多いこと。肋骨や脊柱が無く、背骨の代わりに体液に満ちた中空の軟骨から構成される。卵でなく子どもを産む（卵胎生）ところ。映像からは全身の緩慢な動きと胸びれと腹びれが、それぞれ手足への進化を彷彿させるような動きが印象的だった。川や海の浅瀬の陸に近いところで生息していた多くの仲間が全滅し、環境変化の少ない深海で暮らした現在の 2 種が生き残ったのは皮肉にも感じられる。目まぐるしい競争社会から離脱するのも成功の秘訣かもしれない。

